

小澤重男著『元朝秘史』(岩波新書)を読む

中村雅之

1. はじめに

1994年に岩波新書の一冊として刊行された小澤重男氏の『元朝秘史』は、歴史書『元朝秘史』(以下「秘史」)を言語学的に読もうとする者にとっての必読書である。漢字音写モンゴル語の本文に、傍訳(=逐語的漢語訳)と総訳(=段落ごとの漢語訳)を付すという特殊な形態で記された『元朝秘史』について、当時のモンゴル語の特徴を紹介しながら種々の謎に挑んだもので、何度読んでも飽きない。この書の最大の価値は、小沢氏が自らの考えの筋道を全てさらけ出していることである。それゆえに、読者である我々は、啓蒙されつつも批判的に読むことができる。以下には、その批判的な部分を述べるが、すでに私が『KOTONOHA』誌上で散発的に記した事柄を多く含んでいる。ここではある程度の重複を恐れずに記して、岩波新書版『元朝秘史』を読む際の参考に供したい。

2. 「紐察脱察安」について

現行本「秘史」の冒頭には、漢語書名「元朝秘史卷一」の下に漢字音写モンゴル語で「忙<sup>中</sup>豁<sup>倫</sup>紐察脱察安」とある。小沢氏はこれを「monggol-un niūča to(b)ča'an」と転写し(26頁)、「モンゴル語の子音-bを音写する小字の「ト」が脱記されており、正しくは「脱ト察安」とあるべきもの」(37頁)と記している。「モンゴルの隠れたる要録」と解されるこれら語句は、モンゴル文語(の小沢式によるローマ字転写)で「monggol-un niūča tobčiyān」と表記しうるものであるから、小沢氏の指摘はもつともであるように見える。また、これまでの全ての研究者も同様に「ト」字を誤脱と見なして補写している。

しかし、モンゴル語「-b」を表す小字の「ト」は初めから表記されなかったと私は考える。「紐察脱察安」の部分は、「秘史」本文や『華夷訳語』(甲種本)など明初の資料に見られる精密表記による漢字音写ではなく、元代に一般的に行われていた伝統表記に基づくものである。精密表記においては、音節末子音をもれなく記し、「l」と「r」を区別し、「g-」と「g-」をも区別する。しかし伝統表記では、音節末の「b/d/g/g」は無視され、「l」と「r」の区別もなく、時には有声子音と無声子音が区別されないこともある。

「紐察脱察安」には、まさに伝統表記の特徴が見られる。「秘史」本文では「你兀察」(niūča<隠れたる>、小沢氏の転写では ni'ūča)として現れるものが、ここでは「紐察」となっている。元代の『事林広記』所収「至元訳語」の「奥刺(aula)」と「秘史」の「阿峴

刺(小沢式ではa'ula<山>)」を比較すれば明らかなように、モンゴル語の母音連続を二重母音として漢字一字で記するのが伝統表記ではごく一般的な方法であり、「紐察(niuča)」が伝統表記に基づく音写であることに疑いの余地はない。したがってそれに続く「脱察安」に小字「ト」が記されないのも伝統表記に基づくものと考えべきである。つまり、「-b」を表す「ト」は初めから表記されていなかったことになる。

「忙<sup>中</sup>豁<sup>倫</sup>」という精密表記に、なぜ「紐察脱察安」という伝統表記が続いているのかについては、中村(2003c)に一つの考えを示したことがある。

### 3. 漢字音写本の所拠テキストについて

小沢『元朝秘史』の第3章は、現行の漢字音写本がどのようなテキストに基づいたのかについて論じている。服部四郎氏などの主張した「パスパ文字本」説(漢字音写本がパスパ文字リライト本に基づくという説)への反論として、ウイグル文字の読み誤りと思われる例を挙げている点が興味深い。それによって、小沢氏は漢字音写がウイグル文字本に基づいてなされたと結論付けている。

論理的には、斎藤(2003:pp.40-52)に述べられてように、ウイグル文字の誤読がウイグル文字本からパスパ文字本への段階で生じたと考えれば、漢字音写本がパスパ文字本を経由してウイグル文字の誤読を間接的に継承しうるので、小沢説は十分に説得的ではない。しかし、ウイグル文字本から国字たるパスパ文字本への書き換えは、(仮にそれが行われたとすれば)教養あるモンゴル人によりモンゴル語のみによって慎重に行われたであろうから、それほど頻繁に誤読が生じるのはあまり自然とは言えない。とりわけ「seče=beki」～「sača=beki」のように人名の読みが出現箇所によって異なるというのはなかなか起こりにくいことである。一方、漢字音写本の作成にはモンゴル語の知識のある漢人か、漢語をよく知るモンゴル人が当たることになり、漢語とモンゴル語の双方を駆使しなければならぬ。そこではウイグル文字の誤読が生じる蓋然性は、モンゴル語のみを使用する場合よりもはるかに高いであろう。

また、中村(2003a)で述べたように、与位格接辞「-dur/dür」を表す漢字音写形の「突<sup>𑖄</sup>兒」「都<sup>𑖄</sup>兒」の使い分けからも、所拠テキストがウイグル文字本である可能性を見ることができる。栗林(2002)によれば、与位格接辞「-dur/dür」が前の語から分かち書きされている場合に「突<sup>𑖄</sup>兒」、連書されている場合に「都<sup>𑖄</sup>兒」を用いた可能性があるという。つまり、ウイグル文字における連書と分かち書きに関する習慣が、漢字音写に反映しているということである。パスパ文字の正書法では、分かち書きは音節ごとに行われ、語の単位では行われないから、もしもパスパ文字本が介在していたならば、このようなことは起こりえない。

#### 4. 「doongod-」について

76頁に「秘史」§34の文を引くが、その中に「額薛多汪<sup>中</sup>豁<sup>陽</sup>巴」(言わなかった)という語句がある。このうち、否定詞「額薛(ese)」と過去を表す接辞「巴(ba)」は問題ない。残りの「多汪<sup>中</sup>豁<sup>陽</sup>」は「音を出す／声を発する」を意味する動詞の語根であるが、これを小沢氏は「doongod-」と転写する。この「doong」が不可解である。小沢氏の転写は全般的に当時の音声の復元をも意図した転写(例えば長母音の表記)であるが、ここでの「doong」は何を意味するのか。小沢式では、長母音は「o」のように表記されるはずであるし、hiatusを有する母音連続ならば「o'o」のように表記されることになる。それでは「doong」は何か。小澤(1993)付載の索引では、「多汪<sup>中</sup>豁<sup>陽</sup>」は「do'ongod」と転写されたが、翌年に出版された本書ではその「'」を省いている。おそらくhiatusを有すると誤解されるのを避けたのであろう。

中村(2003b)で指摘したように、本来この動詞は「donggod-」と転写されるべきもので、モンゴル語の円唇広母音「o[ɔ]」を含む「dong」を、漢字一字で表記することが難しいために「多汪」と二字を用いたものである。「秘史」では他に「董<sup>中</sup>豁<sup>陽</sup>」と表記されることもあり、「至元訳語」では同じ語根を持つ語として「蕩郭都」(雷)が登録されている。つまりモンゴル語の円唇広母音を持つ「dong」に対応する漢語の音節がないため、近似の漢語音を持つ「董[tuŋ]」や「蕩[taŋ]」を用いることがあったが、より精密な表記として「多汪[to uɑŋ]」という二字を用いて、あたかも反切のような方法で一音節を表したのである。したがってモンゴル語の音声を考慮に入れた転写をするならば、単に「dong」でよいことになる。「doong」は漢字音写の表記を反映した翻字に近い表記ということになるが、その場合、漢字音写にない長母音やhiatusまでも表記しようとする転写法(2節の「ni'ūča」や「a'ūla」を参照)とやや矛盾を生じることになる。

#### 5. 誤字の訂正など

まず36頁第4行・第7行に「忙<sup>中</sup>豁<sup>陽</sup>命紐察脱<sup>ト</sup>察安」とあるのは、「忙<sup>中</sup>豁<sup>陽</sup>命紐察脱<sup>ト</sup>察安」の誤記である。小字の「ト」はここで補ったものであるから、括弧付きで問題ないが、「中」については初めから記されているので括弧は不要である。

次に、218頁第7行に、

本来は「孛<sup>勅</sup>合罷」、……であったものを「孛<sup>勅</sup>合罷」などに書き直した……とあるのは、最初の「孛<sup>勅</sup>合罷」を「孛<sup>勅</sup>合巴」としなければ意味が通らない。ここは過去形接辞「罷」の下に割注で「原作巴」や「原作別」などと記されていることの意味を説明した部分である。「秘史」モンゴル語の過去形接辞は主語の性数により、「ba/be/bi/bai/bei」の諸形があるが、卷三以降は全て「罷」で表記されている。しかしその下に

割注で「原作巴」「原作別」などとあるのは、もともと「孛<sup>中</sup>合巴」「客額別」などと表記されていたのを、後に「孛<sup>中</sup>合罷」「客額罷」のように統一的に「罷」に書き換えたという説明である。しかし、小澤(1996)ではこの考えを修正し、卷三以降は初めから全面的に「罷」を用いて「孛<sup>中</sup>合罷」のように書かれていたとしている。「原作巴」「原作別」のような注記における「原」は漢字音写本ではなく、ウイグル文字本のテキストを指すという。私自身もこの小澤修正案を支持したいが、現行テキストの成立過程についてはなお十分な検討を要する。

最後に、「ju/čü」の書き分けについて、223頁第1-5行で次のように述べている。

「華夷訳語」の音写モンゴル語では、「秘史」の音写モンゴル語に見られる -ju<sup>2</sup>と -čü<sup>2</sup>(《～して》の意)の使い分けが見られないのである。動詞の語幹末音が母音、-n、-ng、-l、-mで終わる時には「一周」-ju<sup>2</sup>が、それ以外の子音で終わる時には「一抽」-čü<sup>2</sup>が用いられるという規則であって、広くモンゴル系の言語に見られる現象である。この卷三以下の規則が「華夷訳語」の言語の中には見られないのは示唆に富むものである。

問題は、「この卷三以下の規則」という部分である。「一周」と「一抽」が使い分けられるのは、実際には卷三以下にとどまらず、卷一・卷二を含む「秘史」の全編にわたっている。小澤氏は、卷一・卷二部分の第一次漢字音写本(小澤氏のいう「巴字本」)においては「一周」と「一抽」の書き分けが行われていなかったと推測した。したがって、「卷三以下の規則」という表現になったのであるが、これは誤記とは言えないものの、誤解を生じやすい表現である。「華夷訳語」語彙編と同時に作られた(と小澤氏が考えた)「秘史」卷一・卷二が、当初「華夷訳語」と同様に「一周」と「一抽」の書き分けを行わなかったというのは、想定として十分にあり得るが、証明はなされていない。

#### <参考文献>

小澤重男(1993)『元朝秘史蒙古語文法講義』, 東京: 風間書房.

小澤重男(1996)「元朝秘史」原文における「罷<sup>原</sup>作<sup>伯</sup>」についての覚書』『日本モンゴル学会紀要』27.

栗林均(2002)『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について』『言語研究』121.

斎藤純男(2003)『中期モンゴル語の文字と音声』, 京都: 松香堂.

中村雅之(2003a)「服部四郎氏の元朝秘史パスパ字本原典説について」『KOTONOHA』5.

中村雅之(2003b)「mong γ ol(モンゴル)の漢字転写「忙<sup>中</sup>豁<sup>中</sup>」をめぐる」『KOTONOHA』7.

中村雅之(2003c)「華夷訳語凡例」をめぐる覚書』『KOTONOHA』8.